

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23610008

研究課題名(和文) 高齢受刑者の「生活世界」と、出所後のかれらの自立プロセスに関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical Study on the Life World of Elderly prisoners, and process of their independence after release.

研究代表者

細井 洋子 (Hosoi, Yoko)

東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員

研究者番号：80073633

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円、(間接経費) 1,230,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、65歳以上の高齢受刑者について、社会学の観点から彼らの「生活世界」を中心に、彼らの自立への道程を実証的に明らかにした。調査は、日本とニュージーランドの受刑者を対象に、自記式手法で行われた。結果については、複数(相関・多変量)の統計的分析により、2軸(「人間関係の強弱」・「人や社会に対する信頼感」)が抽出され、それにより対象者は4群に配分され、第1群「安定型」(15%)、第2群「自立志向型」(30%)、第3群「他者依存型」(21%)、第4群「不安定型」(31%)となった。結論として、高齢受刑者への自立を促す支援の在り方として、一様ではなく、それぞれの群に対応するものが望ましいと考える。

研究成果の概要(英文)：This study is on the life world of elderly prisoners (aged 65+) and their prospects for reintegration and resettlement both in Japan and New Zealand.

In this research we are trying to do the backgrounds of these prisoners (what is it that has led them into prison at this stage of their lives, how they then adapt to prison life, and what the future holds in store for them). The survey was completed by 635 Japan prisoners and 62 NZ prisoners. As for the main points from the survey, we did the complex statistical analysis (coefficient and multiple analysis) to draw the two axis ([strength and weakness of human relationship] and [trust on people and society]), and composed the 4 clusters (groups) --- [steady] (15%), [independent-oriented] (30%), [dependent] (21%), [unstable] (31%).

As a conclusion from our survey, the strategy for promoting the self-dependence of elderly prisoners is not uniform, but different among the groups.

研究分野：時限

科研費の分科・細目：共生・排除

キーワード：高齢犯罪者 高齢受刑者 生活世界 国際情報交換 ニュージーランド 日本とニュージーランドの比較 高齢受刑者の出所後の支援 高齢受刑者の立ち直り 自省的市民参加

1. 研究開始当初の背景

(1) 問題の認識と二つの先行研究：近年、65歳以上の高齢者の犯罪が社会問題として注目され、高齢犯罪者は高齢者人口の伸びを上回る勢いで増加し、殺人、強盗等の重大事犯、傷害、暴行、脅迫等の粗暴犯、窃盗、詐欺等の財産犯、強制わいせつなどの性犯罪においても、検挙人員・起訴人員、新受刑者数、保護観察新規受刑人員などにおいて、伸び率は軒並み 20 年間に亘って一貫して増加している。

(2) この深刻な状況に対しては、これまで法務省と警察庁による研究がある。法務省の『犯罪白書』(平成 20 年版)において「高齢犯罪者の実態と処遇」と題した特集が組まれた。その基礎となった法務省特別調査「高齢犯罪者の実態と意識に関する研究」法務総合研究所研究部報告 37 (2007) は、「高齢犯罪者の質的な変化が認められるのか」を問題意識とし、調査の手法・規模において、画期的な実証研究の成果である。一方、警察庁による研究として、慶応大学の太田 達也教授らが中心になり、3 力年に亘って実施した三つの調査(高齢被疑者特性調査、高齢再犯者調査、特定 6 罪種の高齢被疑者の犯行要因調査)であり、調査対象者も約 3 万人と、法務省の調査と並んでその規模は相当なものである(太田 達也「高齢犯罪者の実態と対策」警察政策 11 巻、2009)。

しかしながら、法務省・警察庁の調査は、いずれも政策課題を背後にもっていることから、仮説の設定、分析手法、考察などにおいて限界があることは否定できない。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、高齢犯罪者について、その実態をまずは明らかにすることである。量・質において深刻化する「高齢犯罪者の問題」に対して、社会学、臨床心理学、福祉学、刑事政策学、被害者学などの分野の研究者が、それぞれの知見と経験を生かして、問題の本質に迫り、根本的な問題解明の糸口を探るために、本研究を計画したのである。それはこれまでの犯罪研究の域を超え、「高齢者の生活世界」を体系的に知ることによって、かれらの「人間としての誇りや経験」に目を向け、それらに十分配慮した自立のプロセスを追って行くことが「かれらの更生への道」につながると考えるからである。

(2) 今、高齢犯罪者が置かれている問題の最大の課題は、かれらの自立への障害である。何が立ちちはだかっているのか、かれらが求める第二の、第三の人生を、彼らと共に見出すために、代表者らは社会の構成員として担う「責任」を果たすための原点を見出すことに、われわれの研究の大きな意義があると考えられる。これは、同じ社会問題として問われている「児童虐待」への取り組みとは大きく異なる

点である。高齢者の、長年の人生の軌跡(歩み)をまず敬意をもって「知る」ことから、かれらの「犯罪からの脱出」さらには「地域社会の一員としての自省的市民参加」を、かれらに期待することが出来ると考える。

3. 研究の方法

(1) 研究体制

社会学を中心に、周辺の諸科学の知見を集め総合的に研究を行うことができた。

(2) 研究内容

日本の高齢受刑者生活意識の研究

平成 22 年より法務省矯正局と進めてきた高齢受刑者調査は、当初の数庁の計画から全国の 56 庁の刑務所に拡大し、サンプル設定も誤差を考慮し、全国 700 名(男性 500 名、女性 200 名)の規模となった。しかし、数度の調査方法の検討や変更があり、調査期間がずれ、平成 24 年 12 月に調査票を各庁へ配布し、指定票数がほぼ回収できたのは平成 26 年 1 月となった。調査方法は、受刑者の無記名・自記入・留め置き法とし、刑務官の目を通さない方法で封がされ、刑務所単位でまとめて代表者の研究室に郵送された。有効回収数は 635 票で有効回収率は 93.3%(回収率は 100%)と高いものとなった。

<質問内容>

- ・基本属性 / 今回の犯罪の種類や刑期、共犯、要因 / 過去の受刑経験、犯罪の種類 / 入所後の生活状況や不安、悩み、自己認識 / 出所後の希望する生活、不安や悩み / 出所後の被害者ニーズの重要度 / 社会規範意識 / 高齢者介護について / 刑務所との関りについての意見など

ニュージーランドの高齢受刑者生活意識の研究

研究代表者である細井洋子と長年交流のあるニュージーランド・ヴィクトリア大学 John Pratt 教授との国際協力研究として、日本の本研究と同じ調査内容で、同教授の管理と同国法務当局の協力を得て、高齢受刑者調査を実施し、両国の相違点を踏まえた高齢犯罪者の研究を進めることができた。

- ・調査期間：平成 25 年 1 月～5 月

- ・調査地域：ニュージーランド

- ・有効回答数：62 票(男性 56 名・女性 4 名・不明 2 名)

<質問内容>

日本の調査票の英文翻訳版とし、国情に合わない一部を除きほとんど同じ内容である。

日本の一般高齢者の生活意識調査

高齢受刑者調査データと比較するために、65 歳以上の一般生活者を対象に Web 調査をおこなった。

- ・調査期間：平成 24 年 2 月 24 日～2 月 26 日

- ・調査方法：Web 調査

- ・調査対象者：調査機関が有する 65 歳以上

の男女モニター員計 1000 名(男性 775 名・女性 225 名)

<質問内容>

基本属性 / 生活状況 / 家族や社会との関係、地域社会との関係 / 職業観 / 暮らし向き、幸福感、大切なこと、悩み / 不安や相談相手 / 余暇活動 / 政治への関心 / 社会規範意識 / 犯罪や犯罪者に対する意識 / 刑務所出所者のニーズに対する重要度など

(生活状況や大切なこと、社会規範意識、受刑者ニーズなど高齢受刑者調査と同じ質問項目である。)

地域生活定着支援センターでのアクション・リサーチ

地域生活定着支援センターは、出所後の生活が困難な高齢受刑者にとって重要な支援施設であるが、各施設での受刑者に対しては、当方が期待する調査活動が進まず、計画されたアクション・リサーチほとんどできず、今後の同施設の活動状況の進捗状況や受刑者の受け入れ状況を注視しながら研究方法の検討と同施設のあり方を継続して研究していきたい。

文献・資料による研究活動

高齢者犯罪と高齢受刑者に関わる、日本とニュージーランドの文献・資料を収集し分析に役立てた。

4. 研究成果

(1) 日本の高齢受刑者調査・一般高齢者調査結果の比較

高齢受刑者調査は、65 歳以上の 700 名を対象とし、現在まで 635 名(有効回答率は 93.3%)を得た。Web 調査は 65 歳以上の 1000 名(女性は調査期間内の回数者全てを優先)をサンプルとした。その結果、高齢受刑者と一般高齢者の男女構成は近いものとなった。

その結果、高齢受刑者の入所前の生活状況は、一般高齢者に比べ、孤立や経済環境の困難さ、婚姻関連の多様さ、学歴の低さが顕著であり、犯罪の要因と社会復帰の支援のあり方も、そうした条件を踏まえた多様性が重要であることが明確となった。

<表 1 サンプル構成>

サンプル構成	全体		男性		女性		不明	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
高齢受刑者調査	635	100.0%	495	78.0%	87	13.7%	53	8.3%
一般高齢者調査	1,000	100.0%	775	77.5%	225	22.5%	-	-

同居者

入所前的高齢受刑者は、一人暮らしが 52%と半数以上を占め、一般高齢者の 10%との大きな違いとなっている。また、配偶関係との同居も 3 割にとどまっている。出所後の受け入れ先の困難な状況がうかがえる。

<表-2 同居者>

同居者	高齢受刑者 (N=635)	一般高齢者 (N=1000)
(MA) 全体		
1 一人暮らし	52.4	9.9
2 妻又は夫・内縁・同棲	29.1	84.8
3 両親	0.8	0.4
4 父	0.5	-
5 母	2.2	4.8
6 子供	10.6	32.3
7 その他の親族	3	3.3
8 更生保護施設	2	*
9 その他	6.3	2.6
10 不明(無回答)	2.7	*

住まい

高齢受刑者の住まいは自宅やマンションを合わせても 3 割に満たない

<表-3 住まい>

住まい	高齢受刑者 (N=635)	一般高齢者 (N=1000)
(SA) 全体		
1 自宅	25.5	73.5
2 自分・賃貸のマンション	3.0	19
3 借家	14.2	3.5
5 アパート	10.1	2.8
6 友人・知人宅	5.4	-
7 更生保護施設	1.9	-
8 ホームレス	5.4	*
9 その他	10.7	1.2
10 不明(無回答)	2.5	*

就労状況

高齢受刑者の就労率は 4 割近く、また、就労していない理由でも、仕事が見つからないなど、就労が必要な人も多く、一般高齢者との違いが大きい。

<表-4 就労の有無と働いていない理由>

就労の有無	高齢受刑者 (N=635)	一般高齢者 (N=1000)
(SA) 全体		
1 働いていた/いる	37.0	23.7
2 働いていなかった/いる	48.8	76.3
3 不明(無回答)	14.2	-

働いていない理由	高齢受刑者 (N=301)	一般高齢者 (N=763)
(MA) 全体		
1 病気	28.2	2.6
2 仕事が見つからなかった/ない	44.7	13.9
3 仕事をする気がなかった/ない	12.3	8.9
4 お金に困っていなかったから	13.3	8.4
5 専業主婦や家事手伝い	*	21.2
6 退職、年金暮らしなど	*	45
5 不明(無回答)	5.8	-

婚姻、離婚、同棲経験

高齢受刑者の離婚や同棲経験の多さが顕著である。

<表-5 婚姻・離婚・同棲経験>

結婚や離婚、同棲経験	高齢受刑者 (N=635)	一般高齢者 (N=1000)
(MA) 全体		
1 結婚	75.4	97.5
2 離婚	46.0	7.9
3 同棲	30.7	1.4
4 まったくの独身のみ	9.4	2.1
5 不明(無回答)	2.2	-

最終学歴

高齢受刑者の最終学歴は、高校卒業以上では3割強と非常に低い。

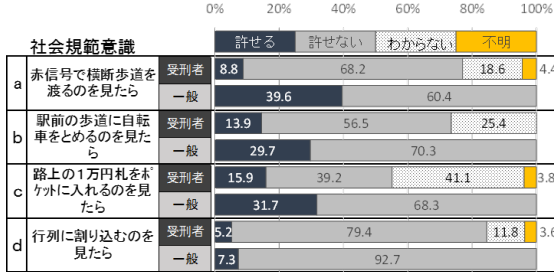
<表-6 最終学歴>

最終学歴 (SA) 全体	高齢受刑者 (N=635)	一般高齢者 (N=1000)
1: 小学校中退	1.9	-
2: 小学校卒業	1.4	0.2
3: 中学校中退	3.8	0.2
4: 中学卒業	39.8	3.9
5: 高校中退	12.1	1.5
6: 高校卒業	22.8	39
7: 短大・大学中退	3.5	2.9
8: 大学卒業以上	5.7	52.3
9: 不明(無回答)	9	-

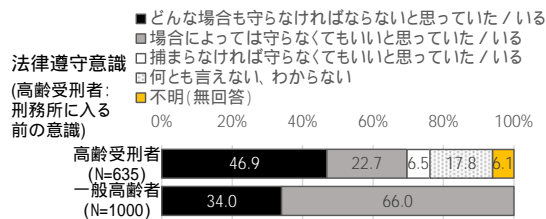
社会規範意識

一般高齢者より受刑者の方が、遵守意識が高い。頭ではわかっているが再犯をする人を、理屈で再犯させないことの難しさが見える。

<図-1 社会規範意識>



e: 法律を守ること



(2) 日本とニュージーランドの高齢受刑者調査結果の比較

ニュージーランド (NZ) の高齢受刑者調査で 62 名の協力を得られ、日本 (N=635) と比較分析した。尚、前提条件として、回答者の罪種は、日本はほぼ実際の受刑者構成に近い。一方で、NZ では調査方法等の理由で、性犯罪が 8 割近くを占めているが、NZ の統計では性犯罪が 25%程度であることを考慮する必要がある。

サンプル構成	全体		男性		女性		不明	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
日本	635	100.0%	495	78.0%	87	13.7%	53	8.3%
ニュージーランド	62	100.0%	56	90.3%	4	6.5%	2	3.2%

今回入所の罪名

日本は半数が窃盗犯であり、NZ は性犯罪が 77%と大多数を占めている。

<表-7 今回入所の罪名>

今回入所の罪名 (MA) 全体	日本 (N=635)	NZ (N=62)
1 窃盗	49.8	1.6
2 詐欺	9.8	3.2
3 暴行	1.7	4.8
4 傷害	4.2	-
5 暴力行為	0.9	1.6
6 性犯罪	1.0	77.4
7 公務執行妨害	0.8	*
8 覚せい剤	12.1	6.5
9 道交法違反	6.1	*
10 その他	10.5	4.8
11 不明(無回答)	10.1	8.1

同居者

一人暮らしの割合は、NZ は日本の半数の 26%である。

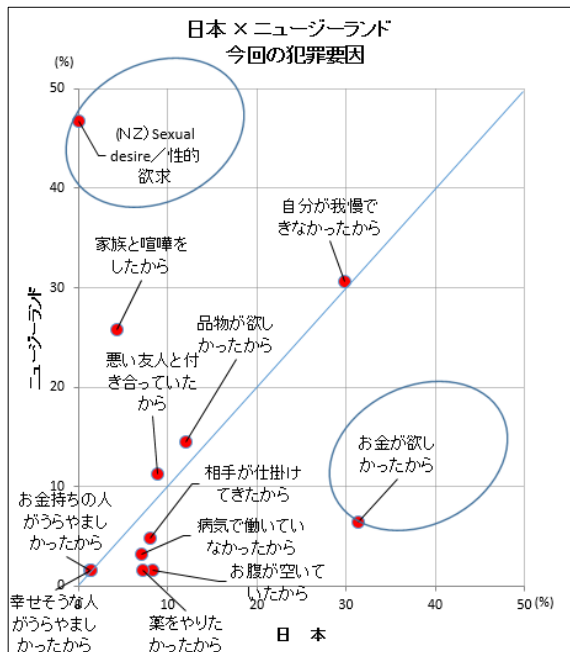
<表-8 同居者>

同居者 (MA) 全体	日本 (N=635)	NZ (N=62)
1 一人暮らし	52.4	25.8
2 妻又は夫・内縁・同棲	29.1	37.1
3 両親	0.8	6.5
4 父	0.5	1.6
5 母	2	-
6 子供	10.6	21.0
7 その他の親族	3	1.6
8 更生保護施設	2	1.6
9 その他	6.3	14.5
10 不明(無回答)	2.7	4.8

犯罪要因

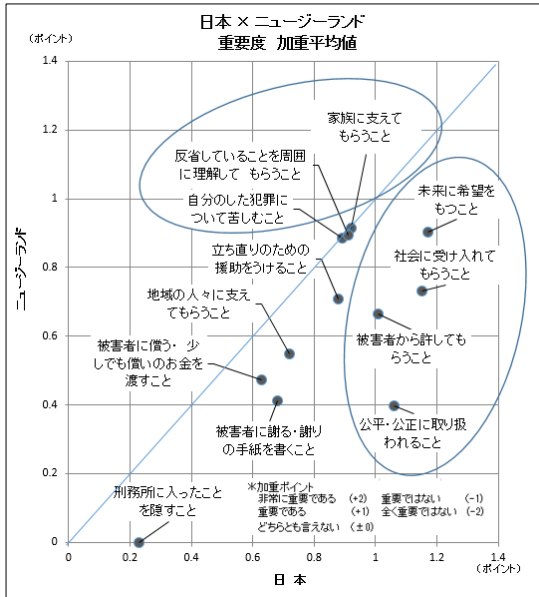
犯罪要因として、共通して高いのは「自分が我慢できなかったから」である。NZ は性犯罪者が多いために「性的欲求(日本では項目設定なし)」が高く、日本は「お金」である。

<図-2 犯罪要因の分布>



出所後のニーズの重要度
 出所後に、自分の行動や社会の対応の重要度について、日本では、未来への希望や、社会に受け入れられる事、公平にされることが重要とする意見が多く、社会との関係に前向きに考えている。それだけ NZ にくらべて社会への受け入れに対する不安の大きさも意味しているといえる。

<図-3 出所後のニーズの重要度>



(3) 日本の高齢受刑者の類型化

日本の受刑者について、複数の統計処理を行い、クラスター分析をした結果、2軸(「人間関係の強弱」と「人や社会に対する信頼感」)が判明し、その結果4群を抽出した。

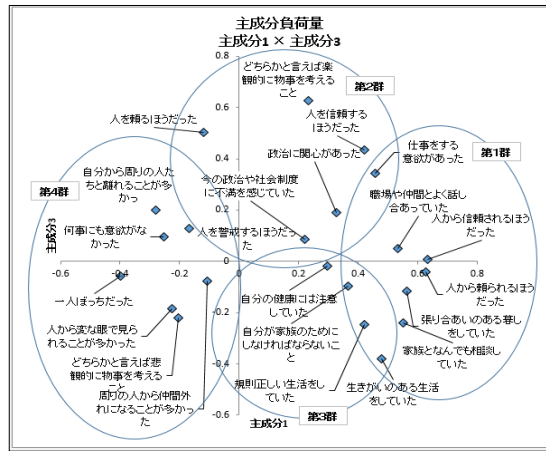
4群について再度データを当てはめると、第1群(「安定型」)は全体の15%あるが、生活歴において配偶者、家族、仕事、経済、住居などにおいて相対的に安定し、一般高齢者と近い。それだけに入所前の不安の大きさに比べて、出所後の不安がかなり大きくなり、彼らに対するサポートの在り方に一定の配慮が求められる。

第2群(「自立志向型」30%)は、第1群に近いが、経済、家族、住居などの点で、これまでの条件は必ずしも良くないことから、出所後の自身の意欲と行動力で、自立を強めていくことになる。

第3群(「他者依存型」21%)は女性が多い。入所前は家族と生活を共にする者が多かったことから、出所後も「他者への依存」を求めているために、家族との関係が修復できるかがカギであるように思う。

第4群(「不安定型」31%)数としては全体の3割程度であるが、受刑者の中で生活上は最も不安定であり、これまでも生活保護などの社会福祉の援助を受けてきたことから、出所後は、各地の更生保護施設・地域生活定着支援センターなどの公的な支援を受けて、社会に戻っていくことになる。

<図-4 2軸の負荷量による項目分布>



4群のクラスターの特徴

<表-9 クラスター別の特徴>

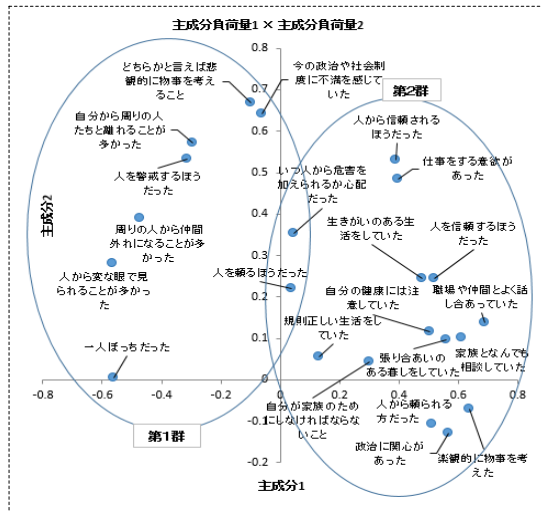
検定値(A<5%以下 B:10%以下 C:20%以下 D<20%以下 E<20%以下 F<5%以下)		第1群	第2群	第3群	第4群
多変量分析対象項目で回答者18名は除く(合計617名)		93	193	133	198
構成 実数		15%	30%	21%	31%
構成 %					
基本属性	性別 女性	13%	13%	20%	12%
	就労率	62%	40%	39%	21%
非就労理由	お金に困っていない	37%	探したがなかった	40%	37%
	病気	40%	20%	40%	16%
	住居 自宅	56%	17%	25%	19%
	一人暮らし	24%	61%	40%	68%
	配偶者同居	65%	22%	42%	11%
単身期間5年以上	82%	56%	59%	46%	
	配偶者有り	59%	21%	42%	16%
入所前の自分の認識へ主要な主成分分析項目	家の為にすることが多い	46%	17%	34%	8%
	周りの心から離れる	7%	22%	6%	25%
	ひとりまっち	7%	21%	16%	51%
	人を信頼する	83%	71%	39%	15%
	人から信頼される	53%	29%	45%	4%
	家族と何でも相談	53%	4%	26%	0%
	人を頼る	15%	36%	5%	15%
	人から頼られる	87%	33%	57%	6%
	人から変な目で見られる	1%	2%	7%	13%
	張り合いのある生活	61%	5%	20%	2%
生き甲斐のある生活	58%	1%	33%	5%	
規則正しい生活	47%	5%	26%	6%	
仕事をする意欲あり	84%	65%	50%	19%	
政治に関心があった	46%	21%	13%	7%	
政治や社会に不満	37%	21%	23%	12%	
自分の健康に注意	80%	55%	66%	41%	
何事にも意欲がない	3%	7%	2%	15%	
どちらかといえば楽観的	72%	85%	25%	27%	
どちらかと言えば悲観的	4%	3%	17%	22%	
生活状況	健康である	52%	34%	25%	35%
	金銭的困難はない	71%	31%	39%	12%
	収入があった	90%	68%	72%	50%
出所後の生活費の予定	仕事49%・年金65%	A		家族の援助12%	生活保護58%
	明るく生活する	60%	46%	44%	28%
今後の希望	仕事中心	44%	他人に迷惑をかけない	71%	仕事中心16%
	再犯しない	68%	73%	60%	66%
	家族と一緒に	50%	16%	34%	10%
義理人情を尊重したい	28%			義理人情8%	
	入所前の困難 毎日の生活	15%	41%	17%	42%
出所後の不安	健康	44%	51%	42%	43%
	毎日の生活	20%	44%	29%	43%
犯罪要因	お金が欲しかった	19%	39%	24%	34%
	空虚				15%
今回の犯罪	窃盗	33%	52%	44%	66%
	覚醒剤	10%	16%	16%	8%
	交通法違反	18%	5%	6%	2%

(4) ニュージーランドの高齢受刑者の類型化
 日本と同様にクラスター分析を試みた。抽出した2軸は日本と同じように「人間関係」と「人や社会との信頼関係」となったが、サンプル数が少なく、2群に配分した。

第1群(「孤立的」50%)は、家族やあ社会との関係も弱く、孤立感が強い。生活の張りや意欲に欠ける事が多く、出所後は多面的な社会的支援が必要である。

第2群（「安定型」49%）は、社会や家族関係も良好で、今後、明るく恵まれた暮らしを望んでおり、第1群と表裏の関係にある。再犯を防止するためには、精神面のケアのあり方を充実させる事も重要と考える。

<図-5 2軸の負荷量による項目分布>



<表-10 クラスタの特徴>

検定値(A:5%以下 B:10%以下 C:20%以下 D:20%以下 E:20%以下 F:5%以下)

多変量分析対象項目無回答者1名除く(合計31名)		第1群	第2群	
構成 実数		31	30	
構成 %		50%	48%	
基本属性	就労率	26%	30%	
	非就労理由	病気 63%	病気 33%	
	住居 自宅	45%	47%	
入所前の自分(主成分分析主要項目)	一人暮らし	42%	10%	
	配偶者同居	23%	53%	
入所前の自分(主成分分析主要項目)	配偶者有り	10%	43%	
	仲間まずれ	42%	7%	
	周りのことと離れる	42%	10%	
	一人ぼっち	58%	17%	
	人を信頼する	33%	67%	
	人から信頼される	42%	70%	
	家族と何でも相談	7%	47%	
	人から頼られる	52%	90%	
	人から変な目で見られる	36%	0%	
	人を警戒	55%	27%	
	張り合いのある生活	16%	60%	
希望	生き甲斐のある生活	10%	50%	
	仕事をする意欲あり	42%	67%	
	政治に関心があった	0%	37%	
	自分の健康に注意	45%	87%	
	どちらかといえば楽観的	36%	90%	
	生活状況	健康である	13%	33%
	金銭的困難はない	68%	83%	
	入所前の生活費	仕事26%・年金39%		仕事40%・年金60%
		出所後の生活費の予定	仕事13%・年金84%	仕事10%・年金94%
	希望	明るく生活する	55%	83%
		趣味を生かす	45%	77%
再犯しない		68%	73%	
家族と一緒に		10%	47%	
入所前の生活での困難 孤独		52%	13%	
	健康	71%	53%	
入所後の不安	一人ぼっちなこと	42%	13%	
	今回の犯罪 性犯罪	83%	73%	

(5) まとめ

これまでの研究から以下の2点を結論とした。日本の高齢受刑者は、窃盗がその大半を占めるが、経済的な問題を根底にかかえている。自立に向けて男女で違いがある。男性は、公的な支援を受けながらも、経済的に自立することが重要になる。一方女性は、何

よりも、家族・親族との関係修復が求められる。ニュージーランドの高齢受刑者は、調査の対象者の多くが性犯罪者であるが、再犯防止に向けては何よりも「自己陶冶」が求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

細井 洋子「高齢犯罪者の概要と課題」(『犯罪と非行』第173号、6-36頁、査読無し、日立みらい財団) (2012)

〔図書〕(計 1 件)

細井 洋子 第部「犯罪とケア」259-282、「おわりに」293-295、鴨志田 康弘「序章」1-10、第部「犯罪とケア」169-203、「終章」283-288、『リアリティと応答の社会学 - 犯罪・逸脱とケア』(鴨志田 康宏、小宮 信夫、細井 洋子編著、風間書房) (2013)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

細井 洋子 (HOSOI, Yoko)
東洋大学・人間科学研究所・客員研究員
研究者番号: 80073633

(2) 研究分担者

辰野 文理 (TATSUNO, Bunri)
国士舘大学・法学部・教授
研究者番号: 60285749

小柳 武 (KOYANAGI, Takeshi)
常盤大学・国際被害者学研究所・教授
研究者番号: 90576216

小長井 賀與 (KONAGAI, Kayo)
立教大学・コミュニティ福祉学部・教授
研究者番号: 50440194

平山 真理 (HIRAYAMA, Mari)
白鷗大学・法学部・准教授
研究者番号: 20406234

矢野 恵美 (YANO, Emi)
琉球大学・法務研究科・准教授
研究者番号: 80400472

渡辺 芳 (WATANABE, Kaori)
東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員
研究者番号: 7059832

西村 春夫 (NISHIMURA, Haruo)
東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員
研究者番号: 60228228

鴨志田 康宏 (Kamoshida, Yasuhiro)
東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員
研究者番号: 60408979